2007年3月25日発行

2007年度春季展

荒ぶる魂

—大西鐵之祐と早稲田ラグビー—

（非売品）

編集・発行
早稲田大学大学史資料センター
Waseda University Archives
〒169-8050　東京都新宿区西早稲田１－６－１
Tel: 03-5286-1814　Fax: 03-5286-1815
http://www.waseda.jp/archives/

©2007 Waseda University Archives.
4,000部　不許複製

この画像は
著作権の関係で
表示できません。

2007年度春季展

荒ぶる魂

—大西鐵之祐と早稲田ラグビー—

はじめに

戦後の早稲田ラグビーを再建すると共に、傑出した理論で日本ラグビーを世界に知らしめた、大西鐵之祐（1916～1995）。危機に直面して勝利を導くその采配は、しばしば「大西魔術」と呼ばれた。だが「大西魔術」は、その激動の人生と決して無縁なものではない。

南方戦での死闘、敬愛する兄の戦死、食糧難の中での監督就任、そしてある天才ラガーマンの死。こうした幾多の試練を乗り越えていくなかで、「大西魔術」は生れていったのである。

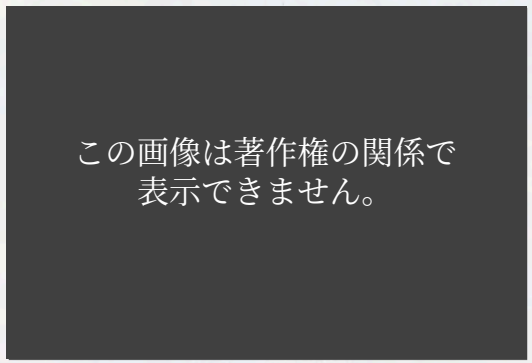
大西が生涯をかけて追い求めた哲学は何だったのか。没後12年、そのメッセージに迫っていきたい。

最後に、展示の趣旨にご理解いただき、さまざまにご支援くださった関係各位のご厚情に、心より感謝申し上げたい。

2007年３月

早稲田大学大学史資料センター

※展示期間中、展示品の入れ替えなどを行なう場合があります。



大西アヤ氏所蔵

〔展示資料〕

1982年英仏遠征　パリ大学戦ポスター

1982年　大学史資料センター所蔵（2007年ラグビー蹴球部寄贈）

早大建学100周年記念として英仏遠征（1982年２月21日～３月13日）が企てられ、大西はその団長兼監督をつとめた。パリ大戦は２月25日に開催された。

最終講義原稿

1987年　大西アヤ氏所蔵

早大教授定年退職（1987年３月）に伴う大西の最終講義は、1987年１月17日大隈講堂で催された。題目は「人間とスポーツ」。立錐の余地のない程埋め尽くされた講堂の演壇から、１時間にわたって熱弁がふるわれた。

パリ大学戦ポスター
1982年２月25日
大学史資料センター所蔵
（2007年ラグビー蹴球部寄贈）

荒ぶる
荒ぶる吹雪の
　逆巻くなかに
球蹴る我等は
　銀塊くだく
早稲田のラグビーは
　斯界になびき
いざゆけ我等が
　ラグビーワセダ
ラ　ラ　ワセダ
ラ　ラ　ワセダ
ラ　ラ　ワセダ

一　ゆさぶり

—生い立ち・早大進学・ラグビーとの出会い—

「試合に出た選手たちが、新人の私たちの所まで来て『スマン』と酒をついでくれた。先輩を乗り越えて選手になった人々の多くは、その先輩の前で、手を握りながらだきついて泣いていた。…部員百二十名のビリッケツで、インゴールでパスをしていた私が、本格的に練習しだしたのはこれを契機としてであった。」（『わがラグビー挑戦の半世紀』1984年、119頁）

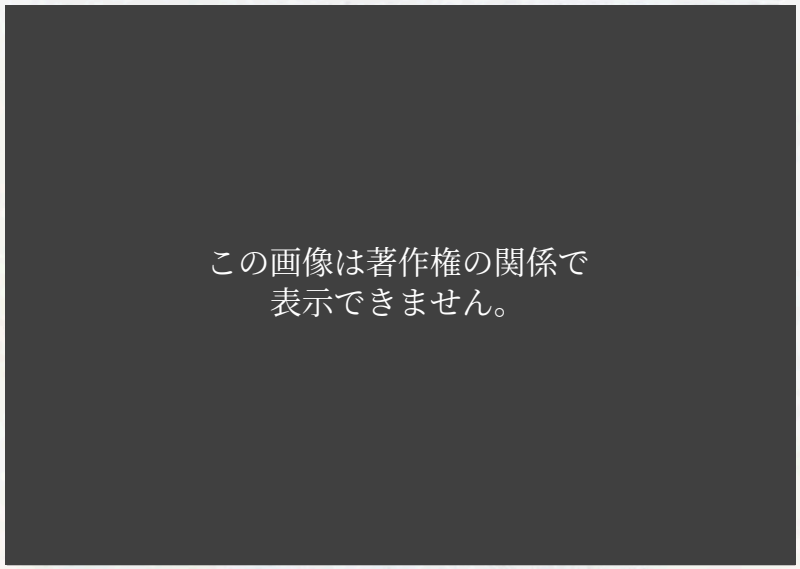
早大ラグビー部時代の大西（右）
大西アヤ氏所蔵

1916年４月７日、大西鐵之祐は奈良県添上郡明治村出屋敷（現奈良市）に生れた。幼少時に両親を失った大西は、歳の離れた兄たちによって育てられた。

1929年春、奈良県立郡山中学に入学した大西は競走部に入部し、ローハードルで奈良県中学大会で優勝、関西大会でも２位になるなど好成績を収めた。34年春、郡山中学を卒業し、早稲田大学第二高等学院に入学した大西は、兄栄造が監督に就任したばかりの早大ラグビー蹴球部に入部した。

当時早稲田は「ゆさぶり」戦法により、２年連続で全国制覇を達成していた。だが大西が入部した年の早稲田は、３連覇を目前にして明治の突進に敗れた。敗北を味わうことで、大西はラグビーの醍醐味を知った。60年に及ぶ大西のラグビー人生は、こうして始まった。

1937年９月、商学部２年となった大西は東京商科大戦に出場した。最初の公式戦出場である。初めて身に纏う赤黒ジャージに、大西は伝統の重みを実感した。以後卒業するまでの２年間、大西はフランカーとして数々の激闘の舞台に立った。



郡山中学競走部時代の大西（前列左から２人目）
大西アヤ氏所蔵

最終講義　1987年１月17日　於大隈講堂
広報課所蔵

1995年６月、大西は東伏見でラグビー部員たちを前に、ひとつのメッセージを送った。亡くなる３ヵ月前のことであった。

「人間には何ともしようがない、何とも、それを自ら自分でそれに遭遇して、それを克服してやっていかなければ、自分でつかむことのできない、例えば生死の問題とか、あるいは闘争の問題とか、…こうした問題は、それに当たって、それに何回も遭遇して、そしてそれを追い越して追い越して、自分でそれに勝っていく、そのことをやってないと、克服して勝っていけない。…」（大西鐵之祐先生を偲ぶ会編『荒ぶる魂』94頁）

若きラガーマンたちへの、これが大西の遺言となった。

五　闘争の倫理

—3度目の監督就任とスポーツ哲学—

「わたしは先ほど申し上げたように八年間戦争にいってきました。人も殺しましたし、捕虜をぶん殴りもしました。しかし、そのときに、こうなったら、つまり、いったん戦争になってしまったら人間はもうだめだということを感じました。…もしなんかできるとするならば、その前にそういう状況にならんようにするための人間をつくっていかなければならんということです。…われわれがスポーツを実践していくなかからグループをつくって、たとえば、わたしはラグビーをやっておりますから闘争の倫理とフェアプレイの精神、あるいはスポーツマンシップを共通の精神としたひとつのグループをつくる。そういうグループを社会の基礎集団としてあっちこっちにつくって、スポーツマンの団結したソシアル・フォーセス、社会的な勢力をつくりあげる。…戦争をさせないための人々の抵抗の環を考えなければいけないと思っております。」（「最終講義　人間とスポーツ」『世界』500号、1987年４月号、293頁）

1981年、大西は17年ぶりに早稲田の監督に就任した。当時早稲田は明治戦４連敗を喫するなど、低迷状態を抜け出せずにいた。大西は心臓を患い、ニトログリセリンが手放せなかったものの、早稲田復活のため三度陣頭に立つことを決断した。

大西率いる早稲田はシーズン開幕から快進撃を続け、12月６日の明治との一戦は全勝対決となった。重量フォワードを誇る明治有利の下馬評ではあったが、６万を越える大観衆を前に白熱のゲームが繰り広げられ、対明治戦５年ぶりの勝利を飾った。試合後、大西は選手たちと共に歓喜と号泣の中で「荒ぶる」を歌った。

1980年代に入り、米ソ両大国間の国際的緊張が高まる中、大西はスポーツの意義をひとつの言葉で表現した。「闘争の倫理」である。人間の持つ闘争性を、スポーツを通じてコントロールできるようにする。そうしたスポーツによる人間教育こそが、戦争への道を阻止する起点となり得る。「闘争の倫理」は大西がそのラグビー人生をかけて培った、平和のためのスポーツ哲学であった。

〔展示資料〕

スクラップブック

1932～5年　大学史資料センター所蔵（2007年ラグビー蹴球部寄贈）

大西栄造「バックローの動き（F.W 全体の攻防の動き）」

大西アヤ氏所蔵

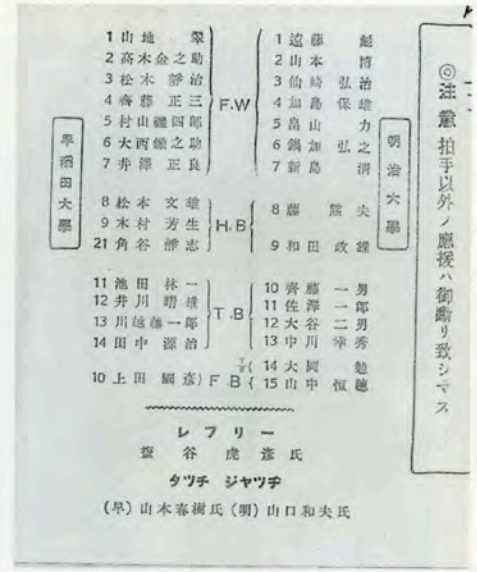
大西栄造（1932年３月商学部卒）は鉄道省観光局に勤めながら、ラグビー部監督（1934～5、39～42年度）として部員を猛特訓した。合宿所の壁には、「勝つのもタックル、負けるのもタックル！」との貼紙をしていたという。1945年７月７日、ミンダナオ島で戦死。

スクラップブック

1937～8年　大西アヤ氏所蔵

1937年12月５日の明治戦を前に、大西はスクラップブックに次のように書き記した。

「吾々はテェフェンスで勝つのでは無い。吾々は敵の失策によって勝つのでは無い。堂々と攻撃の布陣で今迄敵を倒して来たのではないか。我々は攻撃に最高の技術を持ってゐる。その上に不抜の堅塁があるのだ。」



1937年度早明戦パンフレット
1937年12月５日　大学史資料センター所蔵
（2007年ラグビー蹴球部寄贈）

現役時代のラグビーシャツ

渡辺隆氏所蔵

二　撃　て

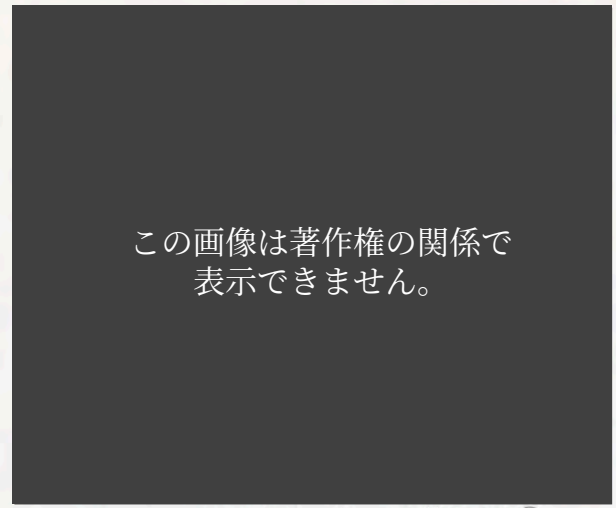
—出征・敗戦・捕虜—

「私は自信を持ってゐる。君達を信頼してゐる。私達の尊い、崇高なる伝統精神が必ずや私を悠々と死につかしめる状態に置かしめてくれる事を。必ずや此の精神が、君達の頭上に勝利の栄冠を戴かしてくれる事を。」（早稲田大学体育会ラグビー蹴球部『部報』第５号、1940年）

近衛歩兵第四連隊時代（後列左から２人目が大西）
大西アヤ氏所蔵

1939年３月、商学部を卒業した大西は東京芝浦電機へ入社したものの、１年を経ずに、40年１月近衛歩兵第四連隊に入隊した。マレー作戦、シンガポール上陸作戦、スマトラ進攻作戦など、南方戦の最前線で銃を構え続けた。

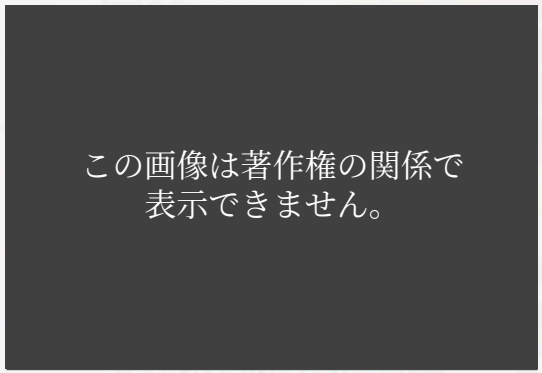
敗戦をスマトラで迎えた大西は、１年近くを捕虜として過した。処刑を覚悟したこともあった。捕虜収容所では、教育の重要性について考え続けた。それ



オール・ブラックス・ジュニア戦のメモ①
大西アヤ氏所蔵

オール・ブラックス・ジュニア戦のメモ②
大西アヤ氏所蔵

「第三回全日本ラグビー強化合宿（資料１）」
1967年　大西アヤ氏所蔵



「日本代表選手強化対策（案）」
大西アヤ氏所蔵

手帳「N-Z Tour 1968　全日本ラグビーチーム」
1968年　大西アヤ氏所蔵

パンフレット　全イングランド対全日本
９月28日　大西アヤ氏所蔵
1971年９月28日、全イングランド対全日本のゲームが秩父宮ラグビー場で開催された。結果は３対６でイングランドが勝利したが、大西はこの試合を次のように意義付けた。「僕のラグビーに対する攻防理論の集大成がイングランドとの試合の実験だった…僕のラグビーの、外人と試合をする基本的な戦法の集大成は、イングランドと日本との東京における試合だったろうと思う」（『ラグビー　荒ぶる魂』164頁）。

大西鐵之祐インタビュー（『朝日新聞』1970年３月８日付）
アマチュアリズムはもともと遊戯の考えからきている。だから自由であり、自己満足を求めることです。一方で技術を追求することによって、スポーツは進歩し、真剣であるが故に、闘争の形をとる。この三つの柱をどう調和していくか、これが世界のアマチュアスポーツ界の大きなテーマといえましょうね。

ゆえ帰国できたら、小学校の教師になろうと決意していた。
46年帰国した大西は、その年12月、入隊前に婚約したままであった高沢アヤを妻に迎えた。念願であった教師への道は、結局断念せざるを得ず、古巣の東芝へ復職した。だがラグビーへの思いは断ちがたく、東伏見のグラウンドへ日々通いつめた。そこで大西が目にしたのは、やせ細った部員たちが懸命に練習に励んでいる姿であった。

〔展示資料〕

早稲田大学体育会ラグビー蹴球部『部報』第１号
1939年　大学史資料センター所蔵（2006年ラグビー蹴球部寄贈）
大西は「一年の回顧」を寄稿し、「我部に青春を捧げ得ぬものは去れ。唯青春の生命を我早大ラグビー部の為に殉ぜんとするもののみ集らん、而して青春の光栄と感喜とを分け合はん」と書いた。

早稲田大学体育会ラグビー蹴球部『部報』第５号
1940年　大学史資料センター所蔵（2006年ラグビー蹴球部寄贈）

陸軍将校用行李
昭和戦中期　大西アヤ氏所蔵
大西はこの行李を提げて南方戦に向かい、戦闘につぐ戦闘を経験した。

手記「妄念」
1948年　大西アヤ氏所蔵
冒頭の「人生の再出発」と題する随想には、「大戦によって亡くなった幾多戦友に代って、祖国復興に第一歩を進める。明るい祖国の再建に。」とある。

北風
北風のただなかに
　白雪ふんで
球蹴れば　ふるい立つ
　ラグビー　ワセダ
抜山の威力
　蓋世の意気
男子の勢　数あれど
ワセダ　ラグビー　ララララ
　ワセダ　ラグビー
　ラー

三　監督の夢

—早大ラグビー部監督就任—

「〔昭和〕二五年の全国制覇によって、益々〔英国〕遠征の可能性が見出された様に思われた。しかし神が私の浅薄な空想に鉄槌を下す時機が来たのである。それは谷口の発病と急逝であった。一年にして私が最も嘱望し、最も愛した人間の生命をこの世からうばい去ってしまった。茫然自失、神をうらみ愕然とした。ようやく自らをとりもどし、ラグビーを考へ、指導について反省をした。

その日から私の夢は英国遠征ではなく、日本の現状に最も適したラグビーの指導とはどんなものであるかといふことに対する研究に変ってしまった。」（手記「監督の夢」）

1953年度早明戦終了後（前列中央が大西）
1953年12月６日　大西アヤ氏所蔵

1960年前後から早稲田ラグビーは低迷を続け、61年度は対抗戦７位にまで落ち込み、Ｂグループへと陥落した。創部45年、栄光の歴史は見る影もなかった。翌62年覇者復活への再建を託され、８年ぶりの監督復帰となった大西は、勝つためには何でも試した。サインプレー「カンペイ」は、このようなどん底状態の中で開発された。

大西率いる早稲田は１年でＡグループに復帰し、３年目には大学選手権準優勝を果した。そして大西が監督を退いた翌65年、手塩にかけて育てた選手たちが大学選手権、さらには日本選手権を制した。早稲田ラグビー史上、初の快挙であった。

1966年、大西は全日本代表チームの監督に就任した。統合されたチームをつくるため、大西は星名秦（京大OB）らの協力を得て、日本独自のラグビー理論を生み出した。「展開・接近・連続」、日本人が体力に勝る外国人と闘い、勝利するための理論である。

1968年５月、この理論が試される機会が到来した。ニュージーランド遠征である。５戦目のゲームとなった最強の対戦相手オール・ブラックス・ジュニアに、大西が鍛え上げた全日本は統一された組織力で向かっていった。そして80分間の激闘の末、ついに勝利した。日本ラグビーの新たな歴史の幕開けであった。

〔展示資料〕

1962年度監督ノート

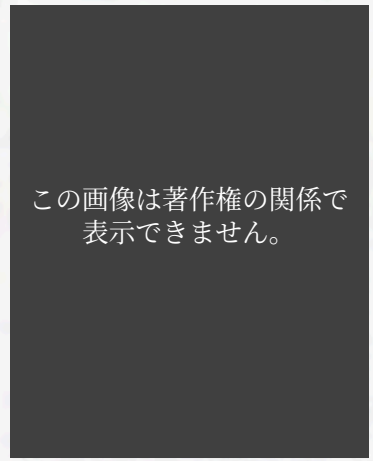
1962年　大西アヤ氏所蔵

「練習目標　１自ら進んで自分でやるとゆう気風の養成。１気分を一新したTeamWork。1 Gameを走り切る体力。…」

スクラップブック

1962年　大学史資料センター所蔵（2007年ラグビー蹴球部寄贈）

1962年12月３日、Ｂブロックの早稲田が王者明治を倒した。翌日の新聞には「ゆさぶり奏功」との見出しが躍った。



早大ラグビー部監督時代
大西アヤ氏所蔵

四　展開・接近・連続

—早稲田再建と全日本監督就任—

「一般的傾向として、外人チームは彼等の性格として、フォワード、バックスの連繋に欠けている。また個人プレーを尊重する風潮が強い。逆に日本のラグビーは、創設以来英雄をつくらず、全員の協力こそ最高のプレーだと指導しつづけてきた。また連続プレーの根源は持久力であり、日本マラソンに見られるように、身体は小さくとも持久力をつけることは十分可能である。彼等より強い持久力をつくり、彼等より早く、長く走り、彼等のくずれた穴をつくならば、ゲームの主導権は握れるはずである。」（『スポーツ作戦講座３　ラグビー』1972年、175～6頁）

1967年度全日本選手強化合宿（前列左から三人目が大西）
1967年７月　大西アヤ氏所蔵

1949年４月、大西は早大理工学部鋳物研究所へ勤めをかえ、翌50年早大ラグビー部の監督となった。以後５年にわたる監督時代に、大西はフォワードのシステム改良などに取り組み、３度の全国優勝へとチームを導いた。

監督１年目の年、大西はある新人部員を抜擢した。山城高校（京都）出身の谷口進一郎である。谷口は大西の期待にこたえ、全国制覇の立役者となった。大西はその巧みなプレーを「天才」と絶賛した。だが翌年２月、谷口は九州遠征へ向かう途中喀血し、闘病生活１年の後、52年５月17日急逝した。20歳であった。大西はその死を悼み、監督として指揮したオックスフォード大戦（52年）とケンブリッジ大戦（53年）、２つの戦績を自ら編み、谷口に捧げた。

1953年ケンブリッジ大の来日時、大西は運命的な書物に出会った。『DANIE CRAVEN ON RUGBY』である。ケンブリッジ大の副主将イアン・ビヤーからこの本を借りた大西は、すぐさまタイプで複製版をつくった。そしてクレイブンの説く革命的なラグビー理論に深い感銘を受けた。大西が長く抱いていた英国遠征という夢は、こうして日本人に適ったラグビー理論の構築へと移っていった。

〔展示資料〕

「昭和廿五年度　春季練習計画」
1950年　大西アヤ氏所蔵
1950年４月15日の入部式から５月31日までのスケジュールが、５期に分けて組まれている。

1950年度早明戦
1950年12月3日　大学史資料センター所蔵
（2006年ラグビー蹴球部寄贈）

ノート「おぼへがき」
1950年　大西アヤ氏所蔵
「昭和二十五年度体育教育実施方策に関する建議」の下書きや、「早稲田ラグビーに対する一考察（新しい入学生の為に）」などが記されている。

第１回朝日招待試合優勝カップ
1951年　大学史資料センター所蔵（2007年ラグビー蹴球部寄贈）
1951年１月15日、第１回朝日招待試合で優勝した時のカップ。九州代表とのこの試合が、1950年度早稲田の最終戦となった。この年度の早明戦から、部歌「荒ぶる」が歌われるようになった。

谷口進一郎書翰　大西アヤ宛
1951年12月　大西アヤ氏所蔵

スクラップブック「谷口千ヤンに捧ぐ OXFORD TEAM 来日の想ひ出」
1952年　大西アヤ氏所蔵

ノート「Modern Theory of Rugby-Foot-Ball　Tour Game of Cambridge in Japan Sep.1953」
1953年　大西アヤ氏所蔵
ケンブリッジ大と慶大及び明大戦の分析ノート。「運動量の研究」と題する研究結果も記されている。

この画像は著作権の関係で
表示できません。

谷口進一郎（1932～1952）
大西アヤ氏所蔵

スクラップブック「谷口千ヤンに捧ぐ　CAMBRIDGE TEAM 来日の想ひ出」
1953年　大西アヤ氏所蔵

手記「監督の夢」
1953年　大西アヤ氏所蔵

手記「３・４・１システムの研究」
1953年　大西アヤ氏所蔵

この画像は著作権の関係で
表示できません。

キックとパス
大西アヤ氏所蔵

『DANIE CRAVEN ON RUGBY』（タイプ版）
1953年　大西アヤ氏所蔵
「この本一冊読むことによって、ラグビーの理論や戦法についての考え方が一新された。それで僕はその本を（ビヤーに）くれといった。そうしたら、『これはまだ一冊しかないんだ、今度帰ってしっかり読むんだ』という。向こうで買ってきてこっちへもってきただけなんだという。いまならコピーすることが出来るが、しようがないから僕のところの研究所のタイピストにそれを毎日ずうっと打たせた。いまでもそれは手元に置いてある。それを翻訳して、ああ、こういうことが書いてあるなということを理解したわけです。」（『ラグビー　荒ぶる魂』90頁）

『ラグビー』（旺文社）
1954年　大西アヤ氏所蔵
大西最初の著書。冒頭の「ラグビーというもの」には、「社会構成の一員としての人間が、死期に自らを省みて『おゝわが人生は、まさにラグビー・ゲームのように美しいものだった』とほほえみをたたえられるような人間的愛情と、行動との動機となる精神、これこそラグビー精神といわれるにふさわしいものである」とある。